Kahuzi Biega National Park
POPOF
established 1992

ポポフニュース

No.27
2020年6月号

新型コロナウイルスの襲来で、不自由な生活を送られていることと思います。ポレポレ基金（Pole Pole Foundation）通称ポポフ（POPOF）の地元コンゴ民主共和国でも首都のキンシャサを中心に感染者が急増しています。ただ、ポポフの本部のある南キブ州では感染者は少く、死者も限られているようです。比較的穏やかな日々が続いていますが、3月からカフジ・ビエガ国立公園は観光客の受け入れを中止しており、州都のブカブでも閉まる店が目立っているので、経済の冷え込みがとても心配です。ゴリラたちの動向は毎日調べられており、これまでのところ密猟もなく、ゴリラたちは平和に過ごしています。

ポポフは1992年に地元コンゴで設立されたNGO（非政府・非営利団体）で、その1年後に開いたポポフ日本支部も27年目を迎えました。ポレポレとは「ぼちぼち」という意味のスワヒリ語で、あせらずゆっくりと運動の輪を広げていこうという気持ちがこめられています。1994年の隣国ルワンダの内戦に伴う大虐殺によって多くの難民が流れ込んだ際も、1996年から地元で内戦が勃発し、多くの人々が森に逃げ込み、兵士たちによってゴリラの約半数が射殺されるという事態になった時も、ポポフは未来への希望を失わずに歩んできました。新型コロナウイルスの襲来にも、この精神を忘れずに対処していきたいと思っています。

さて、この度ポポフ日本支部はオフィスを閉じることにしました。代表者の山極が京都大学を去ることになり、これまで開いていた理学研究科人類進化論研究室のオフィスも使えなくなるからです。そこで、これまでみなさんにお使いいただいていた郵便振替口座もこの9月末に閉じることにいたしました。ポポフ日本支部の活動を完全に閉じるわけではありませんが、今後は規模を縮小して実施していくことになると思います。ホームページはこれまで以上に充実させていくつもりですので、新しいオフィスや連絡先が決まれば、ホームページ上でお知らせいたします。

ポポフの目的は、コンゴ東部にあるカフジ・ビエガ国立公園の周辺で自然環境の保全、絶滅の危機に瀕するヒガシローランドゴリラの保護、地域振興、自然保護教育を実践することにあります。設立以来ずっと政治的混乱が続き、観光客がほとんど訪れない中で、国立公園周辺に居住する地元の人々によって活動を継続してきました。調査団を組織して土壌や動植物相の現状を調査したり、自然資源の持続的な利用をはかるように村人たちに呼びかけています。子供たちの年齢に合わせて環境教育学級をつくり、就学前の児童から、大学生、主婦にいたるまでさまざまな教育事業を実施しています。

こういったポポフの活動を支援するために、日本支部ではカフジ・ビエガ国立公園周辺の人々の生活、アート、ヒガシローランドゴリラを題材にした絵はがき、カレンダー、エコバッグを作成して販売し、展示会、講演会を開いて寄付を募り、現地で保護・教育活動や必要な物品を購入する資金にあててきました。ただ、現地コンゴの政治情勢が思わしくないため、日本ではこれまでポポフの会員を募集するには至らず、人材を派遣することもできていません。新型コロナウイルスの襲来でますます困難になりそうですが、これをきっかけにして国際協力が復活するかもしれません。その時のために、今から準備をしておきたいと思っています。

ポポフによる融和：地域住民とレンジャー達の対面

活動報告

（２０１９年６月から２０２０年６月まで）

▼２０１９年

７月７日　• 緑の国ガボン・野生生物保全とエコツーリズムシンポジウム「ゴリラの生態と保全について」
山極寿一　JICA 中部なごや地球ひろば（名古屋市）

７月１３日　• TICAD7 パートナー事業シンポジウム「ゴリラから見た日本のアフリカ研究」
山極寿一　上智大学（東京）

８月３日　• 日本看護学教育学会第 29 回学術集会特別講演「ゴリラと学ぶ人間の未来」
山極寿一　国立京都国際会館（京都市）

８月７日　• 京都市青少年科学センター特別講演「動物と話をするために―ゴリラのフィールドワークから」
山極寿一　京都市青少年科学センター（京都市）

９月６～８日　• ポポフバザー　堺町画廊（京都市）

９月８日　• 動物園・植物園連携シンポジウム基調講演「ゴリラからの提言―動物の世界をもっと楽しむために」
山極寿一　歴彩館（京都市）

10 月２３日　• 第 60 回全国退職女性校長会東京大会記念講演「ゴリラから見た人間社会の少子化と子育て」
山極寿一　新宿京王プラザホテル（東京）

10 月２７日　• MERRY-GO-ROUND レクチャー 2019 特別講演会「ゴリラとものがたり」
山極寿一　メリーゴーランド（四日市市）

11 月２４日　• 第 62 回京大モンキー日曜サロン「ヒガシゴリラと紛争鉱物…そしてわたしたち」
戸田恵美　日本モンキーセンター（犬山市）

▼２０２０年

１月１３日　• しんらん交流会館 2020 交流ギャラリー講演「ゴリラやサルと森の世界を覗く」
山極寿一　しんらん交流会館（京都市）

１月２５日　• みやぎ教育文化研究センター公開授業「サル化する人間社会―ゴリラから学ぶこと」
山極寿一　東北大学（仙台市）

２月１７日　• HEALTHY FESTIVAL 2020 特別講演「サラダボールの中のゴリラと人間の食物革命」
山極寿一　京都大学国際イノベーションホール（京都市）

会計報告

会計報告（2019 年 7 月～ 2020 年 6 月）

収　入	円	支　出	円
昨年度よりの繰越金	928,748	ニュースレター印刷費	28,080
講演会・シンポジウム　カンパ	30,000	ニュースレター・ホームページ作成費	26,836
ポポフグッズ売上（現金）	262,400	ポポフグッズ材料費・制作費	1,888
寄付 (現金)	112,650	郵送費	47,168
売上・寄付（郵便振替）	976,421	郵送通知料金（2020 年 4 月より）	440
受取利子	7	ポポフへ送金	1,105,000
		次年度へ繰越金	1,100,814
計	2,310,226	計	2,310,226

ろうきん東海 NPO 団体等寄付システムから寄付金をいただいています。

催しのご案内

ダヴィッド・ビシームワ作

▼２０２０年

ポポフ展

８月７日～９日　13:00 ～ 19:00

堺町画廊　（京都市）https://sakaimachi-garow.com

ポレポレ基金のアーティストのダヴィッド・ビシームア、ビチブ・ムフンブーカなどの絵画や彫刻（今までカレンダーやポポフニュースを飾った作品）とポポフグッズなどを展示販売します。会場に来られない方にはポポフホームページ上でもご覧いただける様にいたします。

ビチブ・ムフンブーカ作

近刊案内

- 太田光・山極寿一著　『「言葉」が暴走する時代の処世術』　集英社新書
- 中沢新一・山極寿一著　『未来のルーシー』　青土社
- 養老孟子・山極寿一著　『虫とゴリラ』　毎日新聞出版
- 山極寿一著・ふしはらのじこ絵　『ヤクシマザルを追って―ゴリラ学者と歩く南限のニホンザル観察図鑑』　野草社
- 山極寿一著　『スマホを捨てたい子供たち』　ポプラ社
- 山極寿一著　『人生に大事なことはみんなゴリラから教わった』　家の光協会
- 山極寿一著　『ゴリラに学ぶ男らしさ』　ちくま文庫
- 山極寿一著　『京大総長、ゴリラから生き方を学ぶ』　朝日文庫
- 山極寿一・村瀬雅俊・西平直編　『未来創成学の展望―逆説・非連続・普遍性に挑む』　ナカニシヤ書店
- デニ・ムクウェゲ著、加藤かおり訳　『すべては救済のために―デニ・ムクウェゲ自伝』　あすなろ書房
- 西原智昭著　『コンゴ共和国―マルミミゾウとホタルの行き交う森から』　現代書館
- 長谷川真理子著　『モノ申す人類学』　青土社
- 内田亮子著　『進化と暴走』　現代書館
- 濱野ちひろ著　『聖なるズー』　集英社
- 小川さやか著　『チョンキンマンションのボスは知っている』　春秋社
- パブロ・セルヴィーニュ、ラファエル・スティーヴンス著、鳥取絹子訳　『崩壊学―人類が直面している驚異の実態』　草思社
- 菅付雅信著　『動物と機械から離れて―ＡＩが変える世界と人類の未来』　新潮社
- 古澤拓郎著　『ホモ・サピエンスの 15 万年』　ミネルヴァ書房
- 南條史生・アカデミーヒルズ編　『人は明日どう生きるのか―未来像の更新』　ＮＴＴ出版
- クレア・ブラウン著、村瀬哲司訳『仏教経済学―暗い学問―経済学―に光明をあてる』　勁草書房
- マーク・チャンギージー著、柴田裕之訳『ヒトの目、驚異の進化―視覚革命が文明を生んだ』　ハヤカワ文庫
- 河合香吏編　『極限―人類社会の進化』　京都大学学術出版会
- 窪島誠一郎著　『無言館の庭から』　かもがわ出版
- 角幡唯介著　『探検家とペネロペちゃん』　幻冬舎
- 佐藤洋一郎著　『米の日本史－稲作伝来、軍事物資から和食文化まで』　中公新書
- オギュスタン・ベルク、川勝平太著　『ベルク「風土学」とは何か―近代「知性」の超克』　藤原書店
- 平田オリザ著　『22 世紀を見る君たちへ―これからを生きるための「練習問題」』　講談社現代新書

コロナ前のポポフの活動

ジョン・カヘークワ

昨年 11 月に、ポポフは地元のミティ村の女性 15 人を新しく雇用することにしました。現金収入を得ることによって、薪や建材などを保護区から不法に得てきた習慣を改めるためです。まず、ポポフの事務所で洋裁の学習をして、それから実際に服を仕立てて市場に出荷するようになりました。今では現金収入を得て食糧費や学費に充てられるまでになっています。

アンガ環境学級（幼稚園、小学校、中学校）は通常通り行われています。幼稚園と小学校の生徒数は 623 人、中学校（6 年制）では 128 人の生徒が学んでいます。しかし、多くの生徒たちは毎月 5 ドル（約 540 円）の学費をなかなか納めることができず、半分の生徒しか年額の学費を払えていません。中学校の最上級生たちは大学に進学するための国家試験を受け、無事に進学許可証（ディプロム）を得ることができました。ポポフ日本支部に寄付していただいた図書館は、近隣の学校から多くの生徒たちが利用しにやってきます。規模と蔵書を増やそうと働きかけているところです。

高校生といっしょにゴリラ観察

公園の山地部には 1970 年の創立当時から 7 つの村落共同体があります。一家族当たりの子どもの数は平均 8 人で、とても速いペースで子どもが生まれています。しかし、貧困、失業、不就学のために自然保護政策が進行せず、保護区の自然資源の不法な利用が相変わらず増えています。公園の監視員たちが密猟者の仕掛けた罠を回収し、時折密猟者を逮捕して罰金を命じますが、貧困のために払うことができません。こうしたことが慢性的な公園と地元の人々の葛藤の原因となっています。

ポポフは監視活動を支援するために、低地部と山地部をつなぐ地域で活躍する監視員たちに、昨年から燃料、薬、食料を配給しています。それが功を奏してこの地域にククという 7 番目の監視センターが設立されました。元気を得た監視員たちのパトロール活動によって、公園内に放牧されていた牛を追い出し、3 人の密猟者を捕らえて 3 丁の銃を押収しました。以前の内乱で生き残っているマイマイと呼ばれる民兵も拘束し、公園内の不法な活動を取り締まることに成功しました。

村人たちに公園長が国立公園の価値を説明

残念なことに、政治家に先導された元狩猟採集民ピグミーの人々の一部が元の居住区の権利を主張して、350 ヘクタールの森林を占拠して伐採してしまいました。 ポポフと公園当局はこれらの人々を密猟防止対策のレンジャーとして雇用して、子どもたちの学費などを支援してきました。しかし、地元の政治家たちの土地争いと保護区の畑地への転用要求が過熱し、政治家たちの戦略にピグミーの人々が利用されているようです。自分たちの土地を公園当局が買い上げてその代金を支払わなければ、森林を伐採して火をつけると脅しています

ポポフはこれまで長い間ピグミーの人々といっしょにゴリラを追跡し、村々で共同生活を営んできました。そこで、代替案として公園外の土地を買い上げてピグミーの人々に提供すべく、資金集めを開始していますが、なかなか思うように集まらないのが現状です。ぜひ、日本の皆さんのご協力をお願いしたいと思います。

コロナ後のカフジの現況

ジョン・カヘークワ

コンゴ民主共和国では、3 月中旬に新型コロナウイルスの感染防止のためにロックダウンが発令され、もう 2 か月も外に出られない状態が続いています。カフジ・ビエガ国立公園も全活動を停止し、密猟監視活動やゴリラのモニタリングも大幅に減少せざるを得なくなりました。なかなかゴリラたちの日々の動きを捉えられませんが、少なくともゴリラが生まれたり死んだりしたという情報は得ていません。ただ、このパンデミックが収まるまで観光客は受け入れることはできませんので、収入は途絶えたままです。

ピグミーの人々の破壊活動は一時収まっていますが、また自分たちの権利を主張して公園内に侵入してくる可能性は高いです。そこで、ポポフは地元の観光客用の 20 ドルの入園証を 80 枚買い取って、彼らに配布しました。若い世代はまだゴリラを見たことがありません。ピグミーの人々によって何世紀も隣人だったゴリラをぜひ自分の目で見てほしいと考えたからです。ポポフは今、76 人のピグミーの若い世代を狩猟や採集とは別の仕事を訓練し、公園内に入る動機を減らそうと心がけています。

コロナ危機の間にもゴリラを訪れる村人だち

今、カフジ・ビエガ国立公園の職員は、その危険に満ちた厳しい仕事にもかかわらず 8 か月も給料が支払われていません。薬や装備や食料も供給されていないのです。土地の権利を主張するピグミーの人々が武装した民兵たちと組んで森へ侵入してくるので、監視員たちも兵士とチーム組んでパトロールを行っています。ポポフは彼らの熱意と努力に報いるために、ひよこ豆 45 袋と米 45 袋、それに 100 リットルの燃料を寄付しました。

アンガ環境学級も 3 月以来閉校しています。たとえ新型コロナウイルスが制圧されたとしても、すぐに開校する見込みはありません。先生たちが給料を支払われていないからです。このままでは先生たちが学校を離れていくでしょう。

苗床で作業する生徒たち

植樹活動はポポフの定例行事になっています。これまでは成長が早く建材に適した樹木を植えてきました。今年は初めてアボガド、マンゴー、オレンジ、グアバなどフルーツの苗木を植えました。将来の食用と販売用の目的です。さらに、公園に近いミティ村に苗木センターを作 り、*Hagenia abysinica*、*Dombeya macrocalyx;*、*Albizia gumifera* などの野生種の樹木を植えました。将来保護区内に植樹する目的です。45 人のポポフ女性環境教育グループ（PFEWEG）がこの苗木活動を担っています。

以前お伝えしたように、ポポフはスプルリナ *Spirulina* という藻類を養殖し、地域住民の栄養不足に対処しています。現在では、毎日のようにスプルリナを収穫し、ビスケットを作って住民に配っています。4 月は 100 人にスプルリナ 3 グラムを毎日配給しています。子どもたちの健康は見違えるようによくなりました。ゴリラの保護を提唱しながら、地物住民が飢餓や栄養不足に苦しんでいるのを見過ごしていては公正とは言えません。地元の人々もゴリラも地域の環境も健康であることが何より大事です。地域保全と子どもたちの健康を目指してこそ、ゴリラの生息域が安全に守られると思っています。

皆さんもぜひ一緒に、この地球の貴重な財産を守るために活動しましょう。

デニ・ムクウェゲさんの来日

山極寿一

昨年の 10 月 8 日に、2018 年のノーベル平和賞受賞者のデニ・ムクウェゲさんとお話をする機会を得ることができました。前日、立命館大学から名誉博士号を受けて、同大学の国際平和ミュージアムで講演をした際に立ち寄っていただいたのです。

実は、ムクウェゲさんはポポフのメンバーであるオーグスチン・バサボセさんと親しく、彼の第 1 子を取り上げたお医者さんでもあります。赤ちゃんが未熟児だったので、しばらく保育器で育ち、危うい命を取り留めたのもムクウェゲさんのおかげだったのです。バサボセさんからその話を聞いていた私は、ムクウェゲさんがノーベル平和賞を受賞したとき、まるでポポフが受賞したような気持になったことを覚えています。

ムクウェゲさんの受賞理由は、内戦下で虐待されレイプされている女性、とくに子供たちを治療し、救済する活動です。私も内戦中に現地にいたこともあり、友人の娘がさらわれそうになったり、妻や娘が目の前で兵士にレイプされたという話を村人から聞いていました。現地では幼女をレイプすると不思議な力を得られるというおぞましい伝説があり、自暴自棄になった兵士たちが子どもたちを襲う事件が相次ぎました。ムクウェゲさんはそういった被害にあった女性や子どもたちを引き取り、懸命に治療を続けてきました。体の傷だけでなく、心に大きな痛手を負った人々は家に戻ることができず、ムクウェゲさんは彼女たちが働けるコミュニティを作って活動しています。そして、このような罪を犯した兵士たちを告発し、それを黙認した男たちを断罪してきました。ときには兵士たちに襲撃され、命の危険を何度もかいくぐってきました。

私との対談で、ムクウェゲさんはどうしたら日本をはじめとして海外の目をこの深刻な事態に向けてもらい、支援が得られるかを大きな目標としていました。私は AMDA（Association of Medical Doctors of Asia）などアフリカで医療活動している日本の NGO をいくつか紹介しました。AMDA は 1994 年に隣国のルワンダで内戦が起こり、カフジ・ビエガ国立公園に大量の難民が押し寄せた際に、私の調査基地を活動拠点にしたグループです。ポポフとも一緒に活動した経験があります。また、JICA（日本国際協力機構）を通じて国の援助を受けることもできると思い、いくつかの窓口や関係者を紹介しました。

話の中で、私が家族で過ごしたことから、地元の人々の話題に花が咲きました。妻の描いた市場の絵本を見せて、これはどこでしょう、と問うと、「ああこれはムダカの市だね」とすぐに答えが返ってきました。絵本に描かれたたくさんの女性や子どもたちを指さして、「コンゴの女性たちはみんな自立精神があって強いんだ」と目を輝かせたのが印象的でした。ポポフも最近は女性たちの活動が目立っています。密猟に行こうとする男たちを制したのも女性たちの力です。ぜひムクウェゲさんと協力して、女性が安心して暮らせるような社会を築こうと思います。

阿部知暁　画

カフジにおけるゴリラの近況

ジョン・カヘークワ・山極寿一

カフジ・ビエガ国立公園では、13 の集団を毎日追跡しています。2018 年の生息数調査では 165 頭、2019 年には 168 頭のゴリラが山地部（600㎢）で数えられています。WCS（野生動物保護協会）が 1996 年に行った調査（日本からは山極寿一と松原幹が参加）では 242 頭、2000 年では 129 頭でしたから、内戦によって半減したゴリラの数が少しずつ回復している兆しが見えます。

チマヌーカの息子でブラックバックのナバンガ

今のところ、観光客を受け入れているのはチマヌーカ集団とボナネ集団ですが、2 つとも 1970 年代の初期に人付けされた集団の子孫です。1970 年にカフジ・ビエガ国立公園ができた時、初代公園長のアドリアン・デスクリベールによって初めて人付けされたのが、カシミールと名付けられたシルバーバックが率いる集団でした。1978 年に私が調査を開始したとき、カシミールはすでに亡くなり、息子のマエシェが後を継いでいました。マエシェは 1993 年に密猟者によって命を落としますが、その息子で 1985 年生まれのチマヌーカが生き延びて今のチマヌーカ集団をつくったのです。チマヌーカは父親のマエシェが死んだ後もメスたちといっしょに集団に残っていましたが、14 歳の時にヒトリゴリラになり 3 年後に 2 頭のメスといっしょに集団をつくったのがはじまりです。以後たくさんのメスを得て次々に赤ちゃんが生まれてベビーブームを迎えました。

チマヌーカが集団をつくった 2002 年はコンゴ民主共和国がまだ内戦の影響下にあり、保護区も混乱していました。あちこちでゴリラが密猟の被害に遭い、メスが複数の集団を行き来して新しい集団がいくつもできました。チマヌーカが母親といっしょに移籍したばかりの赤ん坊を殺し、カフジで最初の子殺し例となったのもこの頃です。チマヌーカはその直後にも生まれたばかりの 2 頭の赤ちゃんを殺害しましたが、その後は子煩悩で優しい父親となり、双子が次々に生まれたのです。

ボナネは、チマヌーカに最初に連れ添ったムヒンドと呼ばれるメスが 2003 年に産んだ初めての子どもです。正月に生まれたのでボナネ（Bonne année 新年おめでとうというフランス語）と付けたのです。ボナネは成長が早く、11 歳で背中が白くなり、13 歳で立派なシルバーバックになりました。メスたちに頼られることが多く、2016 年に 1 頭のメスを連れ出して自分の集団をつくりましたが、チマヌーカたちと遠く離れることなく、近くを遊動し続けていました。やがて、メスたちがボナネのもとへ移籍し始め、2019 年には初めての赤ちゃんが生まれて 12 頭の集団になったのです。

一方、チマヌーカはほとんどのメスを失い、残っているのはムウィンジャという老齢のメスのみです。ムウィンジャは数奇な運命をたどってきたメスです。最初はムファンザーラと呼ばれるオスとの間に子どもを産み、ムガルカというオスのもとに移って子どもを産み、最後にチマヌーカのもとにやってきて 3 頭の子どもを産みました。すでに子どもを産まなくなって数年たちます。チマヌーカ集団には 20 頭のゴリラがいますが、ムウィンジャ以外はすべてオスで、ムウィンジャがいなくなればオス集団になってしまいます。オス集団はヴィルンガにすむマウンテンゴリラ以外まだ報告されていません。もしチマヌーカ集団がオス集団になれば、ヴィルインガ以外で初めてのケースとなります。

これまで、カフジのヒガシローランドゴリラはマウンテンゴリラともニシローランドゴリラとも違う社会特徴を示してきました。1）成長期にある息子がメスを連れ出して新しい集団をつくる、2）メスが乳飲み子を連れて集団を移る、です。これらの特徴は、カフジでは複数のオスが共存しない単雄群が多く、子殺しが少ないことに貢献していると考えられてきました。メスが若いオスについて集団を離れるので、

チマヌーカ集団唯一のメス、ムウィンジャ

若いオスがヒトリゴリラとしてメスを得るために、子どもを殺すという手段を講じる必要性が低いからです。でも、カシミール、マエシェ、チマヌーカと３代のオスの集団の作り方を見ると、時代や環境の変化によってゴリラの社会も変わりつつあると感じます。長い目でゴリラの社会を見守っていかねばならないと改めて思います。

	シルバーバック	ブラックバック	オトナメス	ワカモノ	コドモ	アカンボウ	
集団名	13 歳以上	8-12 歳	8 歳以上	6-8 歳	3-6 歳	0-3 歳	合 計
チマヌーカ	1	6	1	4	6	2	20
ボナネ	1	0	3	0	1	2	7
ムブングェ	1	0	9	0	4	6	20
ムガルカ	1	0	0	0	0	0	1
ナマディリーニ1	1	3	6	0	6	4	20
ナマディリーニ2	1	0	7	0	7	0	15
チブルーラ	1	0	6	3	0	1	11
ガニャムルメ	1	0	6	0	3	2	12
マンコト	1	2	9	1	3	2	18
ランガ	1	5	3	0	2	1	12
ムファンザーラ1	1	3	3	2	1	4	14
ムファンザーラ2	1	0	4	0	4	3	12
無　名	1	2	1	0	2	0	6
合　　計	13	21	58	10	39	27	168

ポポフの 27 年

山極寿一

1992 年にポポフが設立され、その翌年にポポフ日本支部を立ち上げてから、27 年間を年表にしてみました。私自身がカフジ・ビエガ国立公園でゴリラの調査を始めたのは 1978 年で、当時はムシャムカ、マエシェという２つの集団が観光客を受け入れていました。その後、1986 年に日本モンキーセンターの調査隊を組織して、低地部を含むより広い範囲でゴリラ、チンパンジー、サル類の調査を行うようになり、1991 年に首都のキンシャサで暴動が起きたときに調査中止を余儀なくされました。この時までに新しくムバララ集団が観光客を受け入れ、研究用にガニャムルメ集団の人付けをしていました。また、ドイツと日本の合同調査チームを編成して、山地部全域に 258 頭のゴリラを数えました。

ポポフを設立したのは 1992 年で、当時ゴリラツアーのガイドをしていたジョン・カヘークワが代表になって、ザイール共和国政府から NGO の承認を受けました。当初の目的は、地元の村人たちでエコツーリズムを企画し、ゴリラ以外の自然や村を訪問するツアーを運営することにありました。ゴリラツアーは国立公園に独占されており、近隣住民に利益が配分されず、住民と公園との反発が強まっていることに危機感を感じたのです。国立公園が成立した 1970 年以前に、公園内に居住していた狩猟採集民のトゥワ人を雇用して救済するという目的もありました。地元の人々の自然保護に対する意識を高め、自分たちの手でエコツーリズムを運営して経済的な効果を得て、保護と経済発展を両立させようとしたのです。それまでにゴリラツアーでジョンさんにお世話になったツアー会社やマスコミ、観光客の人々がこぞって協力を申し出ました。ジョンとは 1980 年代の初めからいっしょに調査をしてきた私も、翌年の 1993 年にポポフ日本支部を立ち上げて支援に乗り出しました。

しかし、順風満帆に見えたポポフの目論見はすぐに大きな障害にぶつかりました。1994 年に隣国のルワンダで民族衝突による内戦が勃発し、40 万人を超える難民がカフジになだれ込んできたのです。難民の中には敗走してきたルワンダ政府軍も含まれており、彼らが持ち込んだ銃によってゾウをはじめ野生動物の密猟が増加しました。難民キャンプには世界各国からやってきた難民支援の NGO がたくさん拠点を構え、国境は大混乱に陥って観光客の数は激減しました。ポポフは当初の目的を変更して、難民たちが公園に侵入して密猟や密伐を行わないように NGO に協力して難民支援活動をするようになりました。日本からも AMDA という医師団がやってきて、私たちも調査基地や車を提供して支援活動に協力しました。

その後、1996 年にはアメリカに本部を置く WCS (Wildlife Conservation Society) と京都大学やバサボセさんのいる中央研究所が協力して調査を行い、山地部のゴリラの生息数を 242 頭数えました。ところが、今度はカフジの南部に位置するイトンブウェ地域から、ルワンダ新政府と同じ民族のバニャムレンゲ人たちが蜂起して内戦が起こりました。ルワンダ旧政府軍に属する難民たちは一掃され、地元の人々とともに森に逃げ込み、何か月も広大な森の中を彷徨うことになりました。2000 キロメール離れた首都のキンシャサまで徒歩でたどり着いた人々もいます。この間、公園内の野生動物は兵士や難民たちの食料として殺されました。観光用に人付けされていたゴリラたちも犠牲になり、4 群すべてがリーダーのシルバーバックを失ってバラバラになりました。

内戦は 1997 年に、モブツ大統領が国を脱出し、新しくカビラ大統領が就任して国名がコンゴ民主共和国に改められて、終結したかに見えました。しかし、ルワンダ旧政府軍、ザイール旧政府軍、民兵のマイマイなどがゲリラ化してあちこちで紛争を繰り広げ、政治的に不安定な時期が続きました。そこで、ポポフはエコツーリズムを主たる目的とすることをあきらめ、住民の環境教育に注力することに方針を変更しました。1999 年にはアンガ環境学級の幼年部を創設、2003 年には小学校、2006 年には中学校を増設して、給料が支払われないために閉鎖した学校に代わって教育に力を注ぎました。ポポフ日本支部も教科書、絵本、ビデオなどの教材、発電機、そして先生たちの給料を支援するとともに、2014 年には図書館を作って教育の推進に協力してきました。苗木センターを開設して公園内の木々の伐採を抑止するとともに、子どもたちの栄養条件を向上するために家畜プロジェクトや養魚池を作りました。こうした活動が国際的に認められて 2012 年にはポポフが Whitley 賞、2018 年には代表者のジョンさんが Tusk Conservation Award を受賞しました。とても栄誉なことと思っています。

内戦による混乱と密猟でゴリラたちは半減してしまいましたが、ポポフは元密猟者たちと和解し、過去の罪を問わずに密猟の防止のために雇用して被害を食い止めてきました。おかげでその後に多くのゴリラ集団が人付けされてベビーブームを迎え、チマヌーカという人気者のシルバーバックが登場してわずかながら観光客が戻ってきました。昨年は山地部のゴリラも 168 頭に増えて回復の兆しを見せ始めています。これまでのゴリラたちの歴史はジョンさんたちによって記録され、アンガ環境学級の生徒たちによって語り継がれていくでしょう。1978 年に私が最初に出会ったムシャムカとマエシェの子孫が、ムガルカ、チマヌーカ、ボナネとして生き残っていることに私は大きな感慨を抱かずにはいられません。

幸いなことに、ポポフ 10 周年、20 周年の式典に私は参加することができました。細々とした活動ではありますが、徐々にその輪は広がっているように思います。残念ながらカフジの治安はまだ回復していませんし、今回の新型コロナウイルスの襲来によってゴリラツアーは中止となっています。何とか早くこの行き詰まり状態を脱出して、当初の目的のように地元住民も観光客も手を取り合ってゴリラと共存できる日が来ることを願っています。

	ポポフの活動	ゴリラたち
1990	京都大学のチームが山地部と低地部で調査活動を展開	山地部に 258 頭のゴリラを確認。これまでにムシャムカ、マエシェ、ムバララの３群が観光客を受け入れる
1991	首都で暴動が発生し、日本人は退去	ムシャムカ集団のニンジャがメスを連れ出して新群をつくる。調査用にガニャムルメ集団の人付けに成功。
1992	ポポフを設立、キャンプサイト、ネイチャートレイル、アートセンターを整備	ニンジャ集団が観光客を受け入れる。
1993	ポポフグッズを制作、日本支部を設立、絵葉書を制作	マエシェが密猟者に殺害される
1994	隣国ルワンダで内戦勃発、大量の難民がカフジへ流入。ポポフは難民支援活動	マエシェ集団がメスと子どもだけで遊動。ラムチョップがシルバーバックになり、ムシャムカ集団は複雄群に。低地部の総合調査でカフジ全域に 16,900 頭のゴリラを確認。
1995	観光客が激減。難民の公園への立ち入りを止め、炭を配給。	兵士が持ち込んだ銃によってゾウの密猟が盛んになる。ラムチョップとミントソースがムシャムカ集団を離れる。
1996	内戦勃発、反政府勢力がカフジを制圧。	山地部に 242 頭のゴリラを確認
1997	新政府が樹立、国名がザイールからコンゴ民主共和国に。バサボセさん京都大学へ留学。	兵士たちによってムシャムカ、ニンジャなど多くのゴリラが殺され、観光用に人付けされた 4 群がすべて崩壊
1998	バサボセさん帰国して結婚。苗木センター設立	第２次内戦勃発、密猟の激化
1999	密猟者と交渉、公園とポポフで雇い入れる。アンガ環境学級（幼稚園）を創設。バサボセさんとビチブさんが訪日	新しいゴリラの集団探し、ミシェベレ集団を人付けに成功
2000	アートセンターでグッズを量産、ポポフのメンバーがケニアのカカメガ森林を訪問	総合調査で 129 頭のゴリラを確認。ガニャムルメが密猟者に殺害される。ビリンドゥワ集団のモニター開始。
2001	ポポフのメンバーが屋久島のエコツーリズムシンポジウムに参加	ガニャムルメ集団が分裂。ブッシュミート取引増加、ゴリラの孤児が保護される
2002	ポポフ 10 周年記念式典に山極が参加	ムガルカ集団の人付けに成功
2003	アンガ環境学級を小学校に拡大。苗木を周辺の村人に配る。女性のための洋裁教室を開設し、服の販売を開始。	ミシェベレが死亡し、集団が解体。ムファンザーラ集団のモニター開始。チマヌーカが子殺し
2004	子供用家畜（モルモット）プロジェクト開始。バサボセさんが京都大学から博士の学位を取得。	ムガルカ集団から多くのメスがチマヌーカ集団に移る。
2005	ビチブさんが死去。ポポフが雇った元密猟者によって公園のパトロールを強化。	チマヌーカ集団の人付けに成功。カフジで２度目の双子が生まれる。
2006	アンガ環境学級を中学校に拡大、高校生をゴリラ観察へ招へい。家畜育成活動、狩猟採集民プロジェクト開始。	ベビーブーム到来。マンコト集団のモニター開始。
2007	苗木の村への配給が 100 万本に達する。日本から送ったパジェロが到着。ポポフのメンバーがガボンの日本の調査基地を訪問。	ムガルカがすべてのメスを失ってヒトリゴリラになる。
2008	ポポフのメンバーが英国で開かれた国際霊長類学会で活動を発表	ムファンザーラが死亡。
2009	ケータイゴリラの羽仁カンタさんがポポフとコルタン採掘現場を訪問。	ムファンザーラ集団が分裂、メスたちが分かれて遊動。
2010	京都で開かれた国際霊長類学会でポポフのメンバーが活動を発表。堺町画廊で世界の絵本展、「ゴリラとあかいぼうし」も出展。世界女性の日にポポフが行進。	ビリンドゥワが死亡。集団が行方不明に。シルバーバックの死亡が相次ぐ。チマヌーカ集団で 4 組目の双子誕生。ムプングウェ集団のモニター開始。
2011	アンガ中学校の生徒が国家試験に合格、キブ地方のモデル校に。バサボセさんガボンの京都大学の調査基地を訪問	ナマディーニ、チブルーラの２集団のモニター開始。
2012	ポポフが英国の Whitley 賞を受賞、ポポフ 20 周年式典に山極とガボンの日本調査隊のメンバーが参加	カフジにおけるゴリラとチンパンジーの種間関係について論文発表。
2013	ポポフの活動を低地部に広げる。カフジが京都大学の研究拠点に。	ムプングウェ集団の人付け開始。
2014	図書館の建設を始める。ゴリラ来日 50 周年シンポジウム。	国際霊長類学会（ハノイ）でバサボセさんと山極が研究成果を発表。
2015	子どもたちや観光客に密猟の現状を説明。図書館完成。	低地部の総合調査でカフジ全域に 3,800 頭のゴリラを確認。内戦で 70%以上が消滅。
2016	ジョンさんが Tusk Conservation Award を受賞。アンガ環境学級に養魚池を設置。狩猟採集民トゥワ人の女性によるゴリラ観察ツアーを実施。	ゴリラの地域文化を共著論文として出版。チマヌーカ集団で２組の双子が生き残っていることが判明。ボナネがチマヌーカから離れて新集団をつくる。
2017	ポポフ 25 周年を中央研究所で開催。環境学級の生徒たちが行進して公園の保護を訴える。	CITES がヒガシローランドゴリラの生息数を 3800 頭と推定。公園がモニターしているゴリラの集団が 13 群 154 頭に。
2018	コミュニテーツーリズムを開始。地元の女性や子どもたちに自然保護教育。スーパーフードのスプルリナの養殖開始。	ボナネ集団に次々にメスが移入するも、別の集団と衝突しボナネが負傷。
2019 以降	低地部と高地部の橋梁地帯に監視センターを設置。新型コロナウイルスの流行によって観光客の受け入れを中止。環境学級休校。	山地部で 168 頭のゴリラを確認。チマヌーカ集団からほとんどのメスが移出。

ポポフ・グッズ

ポポフ日本支部では、ポポフのメンバーが作成したポポフ・グッズを販売して、その売り上げを現地の活動資金に寄付しています。ご協力いただける方は右ページの「グッズ購入方法」を御覧ください

この他にも図柄が選べるバラ売りの絵はがきやここに掲載できなかったグッズも用意しています。グッズページも是非ご覧ください。なお、**9月末以降の販売方法については改めてウエブサイトで通知します。**

ポポフグッズのウェブページ

popof-japan.com/blog/?page_id=24

ビチブ・ムフンブーカ　絵はがきセット

（おまかせ５枚組）　**６００**円

ポポフ 絵はがきセット

（おまかせ 10 枚組）　**１０００**円

フェイスゴリラ ペンダントトップ

（幅 6.5㎝ 高さ 6.5 ～ 7㎝）

頭の上にペンダントトップ用の突起付き

３５００円

ミニゴリラ

（幅３㎝ 高さ 2.5㎝）

３０００円

新ミニゴリラ

（幅４㎝ 高さ３㎝）

３０００円

フェイスゴリラ プレーン

（幅 6.5㎝ 高さ 6.5 ～ 7㎝）

ペンダントトップ用の突起なし

３５００円

歩きゴリラ 小

（幅 5㎝ 高さ 5.5㎝）

４５００円

歩きゴリラ 中

（幅 7.5㎝ 高さ 6㎝）

５０００円

グッズ購入方法：

郵便局で**「青色」**の振り込み用紙にご希望の品名を書き込み、該当する金額をお振り込み下さい。折り返し、グッズをお送りいたします。

口座番号：００８１０−１−９０２１７
加入者名：ポレポレ基金

この口座によるお支払いは９月末までとなります。

郵便振り込み情報
QR コード▲

ウェブサイト

ポポフ日本支部の公式ウェブサイトには、ポポフの活動紹介、カフジ・ビエガ国立公園、ヒガシローランドゴリラ、ポポフ・グッズなどがカラー写真で紹介されている他、今までのニュースレターがすべて閲覧できます。ゴリラの歩く姿がとってもユニークですよ。ポポフのアーチスト、ダヴィッド・ビシームワさんが製作したアートも通信販売しています。ぜひ、ご覧下さい。

連絡先：〒 606-8502　京都市左京区北白川追分町
京都大学大学院理学研究科人類進化論研究室
ポポフ日本支部

ポポフのホームページ（日本語）

popof-japan.com

ポポフの英語版ウェブサイト

ポポフの活動をより広く世界の人々に知ってもらうために、英語版のウェブサイトがあります。ポポフのこれまでの歩みや現在の活動の様子、スタッフ、カフジ・ビエガ国立公園、ゴリラなどについて情報を発信していきます。また、このウェブサイトと並行してブログも開設しました。こちらではポポフの活動だけでなく、国立公園周辺の村や町に住む人々の息遣いが聞こえてくるような、日常的な出来事を記事にして載せています。海外のお知り合いなどにご紹介いただければ幸いです

河辺智弘（ポポフ英語版ホームページ担当）

polepolefoundation.org

英語ブログ：
blog.polepolefoundation.org

KIKADA（歩けない人）の話

語り手：ムワンザ・ドゥンダ
挿し絵・訳：ふしはら のじこ

ある所に一人の男がいました。男は結婚し、妻となった娘は子どもを産みました。けれど､その子どもはキカダ(歩けない人）だったのです。男は妻がそんな子を産んだことを快く思いませんでした。そこで男は、もっとまともな子どもが欲しくて別の娘を妻にしようと思いました。男は美しい娘を妻にし、新しい妻は五体満足な子どもを産みました。でも最初の妻とキカダも同じ所で暮らしていました。

そうして 15 年ほど過ぎた頃、男の国で大きな戦争が始まりました。やがて男の住む地方へも戦が近づいて来ました。屈強な兵隊が強力な武器を持ち、近くの村々を占領していました。男の村へももうすぐ兵隊がやって来ることは分かっていましたが、皆なすすべなく過ごしていました。それから２日経つと、鉄砲を撃ち合う音が近くに聞こえてきました。

その時、あのキカダが言いました。
「ぼくにいい考えがあります。ぼくの知恵を使って、この村に兵隊が来て村人が殺されることがあっても、ぼくたち父さんや母さん、兄弟たちと父さんのもう一人の奥さんも死なずに逃げられるようにしましょう」

それを聞くと誰もが驚いていいました。
「なんだって！歩くこともできない者が人を助けられるだって？」
「まあ見ていてください」とキカダはいいました。
キカダは父さんはじめ家族みんなを大きなルクンベ（木をくり抜いて作ったトーキングドラム、村人を呼び集める時や他の村に伝達する時に叩く）の中に入れました。みんなはなぜルクンベの中に入るのかわかりませんでしたがキカダには考えがありました。

やがて兵隊たちが村にやって来ました。兵隊は家々を焼き人々を殺しましたが、キカダの家族はルクンベの中にいたので無事でした。しかしすぐに、キカダたちは村を出て遠くへ逃げなくてはなりません。兵隊たちは村を占拠すると居座るでしょう。そうなるとルクンベの中に居ては、食べ物も水も手に入れることができません。

そこでキカダはルクンベの中であるものを作り出しました。それは飛行機のように飛べるキングングという魔法の乗り物でした。キカダはそれを見事に作り上げました。そして、父さん母さん、父さんのもう一人の妻と子どもたちをキングングに乗せました。夜になり兵隊たちが眠りにつくと、キカダはキングングをゆっくりと外に出し、その飛行機は徐々に飛び上がりました。上へ上へと上がり夜の間中飛び、兵隊の上を横切って、戦のない場所まで飛んで行きました。人々はキングングがやって来るのを見ると、あれは飛行機だと言いました。
その道すがらキカダはこんな歌をうたいました。
「キングングはマロンゴに行くよ。私は逃げて行く。戦から逃げて行く。私が歩ける足を持たずに生まれたことで、見捨てた父さんも連れて行く。今日まで母さんはもう子どもを産むことはなかった。それは普通の身体ではない私を産んだからなのだ」

２日の間飛び続け、とても遠いところまでやって来ました。キカダはキングングを下に降ろして森の中に降り立ちました。キカダは父さんに言いました。
「さあ父さん、ここに村を造りましょう。戦はここまでは来ません。私達はいくつもの大きな河を越えてきました。兵隊はここまで来られません」
父さんは言いました。
「息子よ、どうもありがとう。まず村を造ろう。そうして私の思っていることを話そう」
そこで他の丈夫な兄弟たちは木を切り、家を２軒建て始めました。１軒はキカダの母さんのため、もう１軒は自分たちの母さんのために。

やがて２軒の家ができ上がると、父さんは子どもたちを呼び集めて話しました。
「子どもたちよ、私は間違っていた。最初の母さんが産んだ子は歩けないキカダだった。私はそんな子に用はないと思い、その子の母さんをないがしろにして、君たちの母さんをめとった。けれどキカダがいなければ、私たちは他の村人と同じように死んでいただろう。そこでだ、今日から私が死んでしまった後もずっと、たとえどんな子どもが生まれても､その子を疎んではいけない。寝たきりの人でも、手のない人でも、また目の見えない人でも、足のない人でも大切にしなければいけない。その人もまた君たちを助けてくれるだろう」

このお話はこれで終わりですが､私たちも同じことです。もしあなたの妻が身体の不自由な子どもを産んでも、妻を追い出したりしてはいけない。それは彼女の罪ではないのだ。もう一つは、身体が不自由な者でも、いつかあなたを助けてくれるのです。

POPOF ニュースに掲載した画像・写真で特に記載が無いものはポポフ本部か山極寿一によるものです
Copyright © 2020 Pole Pole Foundation, All Rights Reserved